# 仏教学の話（2・1・20）

長尾　雅人（昭3・文乙）

私、三高会館にはいつも御無沙汰ばかりで、昨年もアメリカへ講義のため半年近くも行ったりして、長い間ここへ参ったこともなかったのですが、昨年末の十二月に久しぶりにやってきて、高野先生のアイルランドのお話、大変興味深いお話をうかがうことができました。ところがその時、突然、井垣さんが来月何か話をせよとおっしゃる。私、何も面白い話の持ち合わせもないので、しきりにお断りしたのですけれども、一向お聞き入れがない。仕方がないから自分がやっている仏教学について話すなら、これは別に難しいわけはない筈だ。まあ仏教については皆さまいろいろ御存知でしょうが、仏教学という名前でどんなことをしているのか、そんなことを話してお茶を濁そうかなと思ったわけです。

もう一つ、最初から質問をいただき、それに答えるという、それだけの集まりにしたらどうだろう。いつも何か仏教について疑問を感じておられるようなことがあれば、それについて知って

る限りのことはお答えしよう。そうすれば話の準備をする必要もないし、気楽にお話ができる。そんなずるいことを考えながらここへやって参ったのですが、こうして錚々たる方々が沢山お集まりになっているのを見て、先ほどからやゝたじたじとしておる始末です。

で、今申しましたように一体仏教学なるものは何をやっているかについて、皆様からの質問会ということにすればそれもいいのですけれども、それにしても何か多少は話のきっかけになるようなものをと思って、昔作った年表のようなものがあったので、それをお配りしました。一体これは何の図だという、そういうご質問もあるかもしれないと思ったからです。

そもそもその仏教学という名前はですね、これは京都大学にございます。そして国立大学では京都大学にしかございません。東京大学その他では、印度哲学とか印度学とかの講座に含まれておりますが、京都大学では印度哲学もあり、仏教学もあり、それから梵語梵文学という講座も別にあります。インド古代からのサンスクリット語やパーリ語、それで仏典が記されている、これはそういうインド文学の講座です。

仏教学という名前は、日本よりも外国の大学で一般に用いられ、仏教学講座、あるいは仏教研究のプログラムが、アメリカあたりでは殆どの大きな大学にあって、学位（PhD）も仏教専攻で取得できます。日本の私立大学には仏教学講座はたくさんありますが、国立大学では京都だけ。これは、京都大学の文学部が明治四十年頃創設され、哲学や宗教学ができましたが、その当時か

らのマスタープランとして宗教学の中にさらにキリスト教学、仏教学、神道学などの設置が考えられていたからです。その仏教学ができたのが昭和の初め、その後、キリスト教学も出来ました。しかし神道学なるものは、今もって出来ておりません。文学部などというものは非常に力が弱いのか、あるいは重視されないのか、なかなか新しい講座は実現しないのです。とにかく、仏教学という名前にはそういう由来がございます。

これに関連して思い出すのは、日本の大学、何処へ行っても日本哲学の講座がないことです。哲学と言えば西洋哲学であり、そしてインド哲学や中国哲学もありますが、日本哲学の講座は殆どどこへ行っても見かけられないようです（国学院あたりにあるのかも知れませんが）。戦時中に日本精神史への要望がかなりありましたが、戦後はそれも沙汰やみです。ですから外国の学生が日本の思想史なり日本人の哲学や思考の本質を研究したいと思って大学へ来ても、どこで誰について研究していいのか見当がつかない、といってこぼしているのを聞いたことがあります。これは考えてみれば変な話で、史学には東洋史もあれば西洋史も日本史もある、いろいろな外国文学と並んで国語、国文学の講座もある。しかし哲学だけはそうではございません。それには色々事情があるのでしょうが…。まあその間にあって仏教学やキリスト教学があることは、京都大学の特色といってよいのでしょう。そのキリスト教学も、例えば同志社では、神学部で神学、神の学、という名前で行なわれていますが、近ごろ、東京のミッションスクールなどでもキリスト教

学という名前がだんだん使われるようになっているらしいです。

ところで一体、仏教学では何をやっているのか、というのですが、もちろんそれは仏教の研究でございますが、仏教の研究といえば、日本などは随分昔からやっている古い学問だろうとお考えでしょうね。世界でも一番の先輩格に当たるのじゃないかとお考えかも知れませんが、実は今いう仏教学はそうではございません。やはり近代のもので、つまり英語で Buddhist Studies といったり、ドイツ語ではしばしば Buddhologie などと申しますが、それはごく近代のものです。なぜ近代かといえば、まあそうですね、英国がセイロンを手に入れたのが約二百年前、次いでインドを全面的に統治するようになりますが、そのためには、その土地の古代からの法律なり哲学なり宗教なりを調査することが必要になりました。殊にセイロン、今はスリーランカと申しますが、そのセイロンは全くの仏教国といってもよろしいですね。あそこでは、坊さんの座る場所が公共の場所ではみな大臣よりも高い位置に設けられます。タイやビルマでも多かれ少なかれ同じようなことが見られます。そういう社会ですから、仏教の研究もヨーロッパの各国で熱心に行われるようになりました。それが二百年くらい前からのことです。

こうした近代の仏教学について、ここでは特に言語の研究を中心にしてお話を致しましょう。思想に関する学問にとっては、言語の研究が重要な手がかりを与え、基礎的なもの必須なものと

して先ずその研究が推進されます。

仏教の典籍が記された言語は、サンスクリットとパーリ語ですが、これらの言語で記された仏典の研究は、今から百五十年あまり前にヨーロッパで始まりました。しかしこれらの言語、とくにサンスクリットの研究は、すでにそれよりも早くドイツを中心にフランスや英国など、各地の大学で盛んに研究されておりました。その結果、インドの文物がヨーロッパの哲学者や思想家、芸術家や音楽家などに大きな影響を与えたことはよく御存知のことと思います。仏教研究はそれらよりも少し遅れます。

ところでサンスクリット Sanskrit というのは、いわゆる梵語のことですが、「完成された言語」を意味し、インド古代からの文語なのです。それに対してパーリ Pāli は線・規範の語義ですが、特に「仏教の聖典」を意味します。同じく文語ではありますが、サンスクリットの俗語の形です。初期の仏典、すなわち仏陀の説法はこのパーリ語で表わされました。それが早く紀元前三世紀にセイロンにもたらされ、今に至るまでセイロン、ビルマ、タイなどのいわゆる南伝仏教の聖典となっています。インド内地では、紀元前後からそれがサンスクリットで記されるようになりました。

ヨーロッパの学者たちはこれらの典籍の写本を収集して盛んに研究し、また長年にわたってそれらを編集したり刊行したり、あるいは翻訳したりなどのしごとに携わりました。一方では、そ

の頃までにすでに種々の字引もできあがり、特にドイツ語で書かれた七冊から成る大きなサンスクリットの辞書が、一八五二年から約二三年かかってロシヤの当時のペテルスブルグから出版されましたが、これなどは今なおスタンダードの辞書として尊重されています。

このようなヨーロッパの学界に向かって、日本から初めて南条文雄・笠原研寿のお二人が東本願寺から派遣されたのが、明治維新がようやく安定を見るようになった明治九年（一八七六）のことです。オックスフォードでお二人は仏教の研究に従事したのですが、日本で長年蓄積されてきたお二人の仏教の知識は、指導教授のマックス・ミュラー博士にとっても頗る貴重なものだったに違いありません。六年後に帰朝した南条氏が初めて東大でサンスクリットの講義を始めたのは、今から百年余り前のこと、印度哲学科が東大に創設されたのはそれから更に十五年後のことです。このようにして近代仏教学が、日本にもようやく芽をふき出すようになりました。

それまでの我が国の仏教学は、わが国に限ったわけではありませんが、漢訳の仏典だけが唯一の資料でした。漢訳の仏典はもちろん貴重な存在ですが、何にしても翻訳であって原典ではありません。例えば哲学の先生がギリシア哲学を研究しようとするとき、明治の初期ならばドイツ訳や英訳でそれを研究したかも知れませんが、現在では、訳ではなくギリシアの原典の知識がなければ研究者とはいえません。仏教の研究も同じことで、漢訳の知識だけでは現代の仏教学にはなりません。外国の小説や詩やドラマなどの文学にしてもそうで、日本訳を読んだだけではフラン

ス文学を論ずるわけには参りません。話の筋道はわかるけれども、もとのものとは味がすっかり違うということがあるからです。

人間の思想は、言葉に深い関係を持っています。発想の仕方や表現の仕方が、その人間の話す言葉の構造に深く影響されているからです。従って哲学とか宗教とか思想を扱う研究では、それらの思想が生い育った言葉、それらが記されている言葉、に対する知識が必要です。その言語の構造なり、文法なり、あるいは言い回しの癖や、語彙の使い癖などに関して、何らかの知識を持ち親しみを持ち得ることが必要で、それで初めて納得がゆくような理解が生まれると思われます。日本の仏教学的研究は、ヨーロッパのそれに比べてもちろん遙かに長いのですが、今申したような意味で、現代の仏教学では仏教の原典語であるサンスクリットやパーリ語の研究がその中枢的な位置を占めることになります。

ヨーロッパの人々は、その言語の研究から直接仏教に接触するようになりました。ところでその研究の資料ですが、それには写本というもので、古くは貝葉といって棕櫚に似た葉に記し、後には紙にも書いたものが沢山あります。ところがインド教の典籍、写本は頗る多量ありますが、仏教の写本はインドには一つも残っていませんでした。パーリ語による仏教がセイロンに伝えられ、その典籍が現在にまで及んでいることは、先に申しましたが、サンスクリット梵語の写本はインドでは発見されず、殆どすべてインド以外でヨーロッパの学者たちが発見したものです。イ

ンドでは、声や音を尊びますが、中国とは違って、文字そのものは余り貴びませんし、殊に仏教の写本はイスラム化したインドではどんどん滅んで失われたことでしょう。しかし中国にも仏教の写本は皆無でした。中国には玄奘三蔵など、仏典の漢訳を行なった人々が、多量の写本を将来した筈ですが、それが一つも残ってはいません。日本からの留学僧たちが土産にもらった貝葉の一枚二枚が貴重なものとして日本では方々に残されていますが、中国では読めない外国の文字は余り尊重されないで見捨てられたようです。

梵語の仏教写本は、主としてネパールから多量に発見されました。それからチベットにもかなりの量が残っていました。その他、西北インドのある廃墟から偶然に発見されたり、中央アジアからも主として断片ですが古い写本がいろいろ発見されています。

ネパールへは、私、三十五年ほど前に一度だけ行ったことがあり、国立の大きな図書館と個人の蔵書家の書庫を二箇所見せてもらうことが出来ました。図書館といっても書庫と事務室があるだけで、特に閲覧室もなく、またその蔵書はすべて古い写本類で、現代の刊行物は一冊もありません。そこの司書は、古代の文字、それも時代によって幾種類もあるのを、すらすらと読むことの出来る人でした。これらの写本は、インド教のものもありますが、大部分は仏教の典籍のようでした。中には名も知られないようなものがありますが、一応の表題その他のカタログはできておりました。その他にネパールには、個人が古写本を家宝のようにして持っていることも多いよ

うです。わが国の大学や研究所にも、今ではこの種の写本がかなり所蔵されていますが、それらは大部分がネパールから、一部はチベットから入手したものです。このようにして仏教の典籍の本来の姿をわれわれは見ることができるようになりました。しかしその量は、かなりの量ではありますが、漢訳の大蔵経にくらべると、その何十分の一にしか当たりません。

ヨーロッパは、これら仏教の写本を発見し、研究し、それを通じて初めて仏教というものに出会いました。西洋による東洋の発見は、過去数世紀にわたって徐々に進められて参りましたが、哲学的・宗教的・思想的な面に於ける発見は、まさに近代に始まったといってよろしい。その中でも仏教との出会いは、まだ二世紀足らずに過ぎませんが、その意味で仏教学は近代の学問だというのですが、古代からの写本という原典の研究から始まっています。こうして西洋が仏教を発見し、初めて仏教に遭遇したわけですが、このような意味で仏教に遭遇したのは、西洋だけではありません、日本を含めて全世界が初めて現代に於て遭遇しつつあるわけです。

つまり日本に仏教が輸入されたのは、紀元六世紀のことですが、右のような意味での仏教との出会いは明治以後初めてのことです。それまでは翻訳を通じての、いわば隔靴掻痒といった状態での仏教の受けとりかたでした。もちろん当時の人々はそうは考えず、漢訳を産みだした中国が、殆ど仏教の母国ででもあるかの如くに思っていたことでしょう。しかし現代の仏教学は、漢訳だけですますわけにはまいりません。原典から出発して論ずる欧米の学者と太刀打ちするためには、

こちらもそれだけの準備をしなければなりません。

ですから現代の仏教学は、なかなかたいへんです。漢訳の仏教やそれを承けた日本の仏教はもとより、インドの原始仏教、それが展開した大乗仏教、セイロンやビルマなどのいわゆる南伝仏教、さらにチベットの仏教や中央アジアの仏教など、これらがすべて仏教学の対象です。地域的にも広汎な分野にまたがり、時間的には約二五〇〇年の歴史をカバーすることになります。そしてそれらの原典に用いられた言語に対する知識も必要なのですから、なかなか大変です。私などはその中で主としてインドやチベットのことをやっていて、日本のことについては甚だうといのですが、仏教学としては一応この広い領域をすべて包含することになります。文学部には、例えばアメリカ文学の講座もあります。それとこれとを比較することはできませんが、地域の広さや歴史の長さなどの点では、まるきり比較になりません。言語の点でもサンスクリットやパーリ語と共に、漢文の読解力も極めて重要ですし、さらにチベット語の理解も要求されます。

ついでにチベット語やチベット仏教について一寸お話致しますが、チベットにはチベット訳大蔵経というものがあって、主としてインド原本からの翻訳ですが、漢訳の大蔵経に比して質・量ともに遜色のないものです。ただ八世紀ないし十・十一世紀のころの翻訳ですから、漢訳に比してかなり遅く、それ故、翻訳された経論も少し違います。何よりもその特色は、梵語原本からの直訳であるということです。まだ文化的に未開のころのチベット語、語彙の貧弱なチベット語に、

すでに高度に発達していたサンスクリット文献を移そうとしたのですから、多くの新造語を作り、新スタイルを考えだして直訳風に訳さざるを得ませんでした。従ってこれは一般のチベット人には甚だ理解が難しい、いわば極めて文語的な文語で書かれた大蔵経なのです。しかしその点が現在の学者にとってはたいへんに重宝です。つまり直訳ですから、原本の梵語がどんな形であったかをこのチベット訳からは想定しやすいわけです。この点で、サンスクリットの原典が現在失われているようなテキストについては、チベット訳が大きな助けになります。このような大蔵経をもとにしてチベットの学僧たちは懸命に勉強して、この約千年の間にチベット特有の仏教を展開し、独自のチベット文化が築き上げられました。

以上のことからおわかりと存じますが、今の仏教学では漢訳も大事ですが、何よりもサンスクリットの知識、それにチベット語の知識も必要です。この少なくも梵（パ）・蔵・漢の三つの言語の修得が仏教学には必要だという考え方は、もともとヨーロッパの仏教学者、特にフランスやベルギーの学者の方法論といってよいものです。この方法論が私どもの学生の頃から漸次わが国にも伝わって参りました。しかし考えてみるとこれらの言語の修得はなかなか容易ではありません。

かつて大学に在職していた頃、いろいろ学生が仏教を研究したいと言ってやって来ましたが、なるべく断わる方向で話をしました。それは第一にこれらの基礎的な言語の修得が困難だという

こと、第二にはそれらを修得して仏教学を修めても、金儲けにはならないということがあるからです。実際、飯の食いはぐれになってもらっては大いに困ります。アメリカあたりでは、これと逆の風潮があります。なるべく多くの学生が集まると、その学科は人気があることになり、学生数が少ないとその学科は不必要な学科としてやがて廃止されることが無いとは限らないからです。その点、日本の国立大学は有難いもので、どんなに学生が少なくなっても講座が廃止されるようなことはまずありません。

サンスクリットについては、先ほどもお話しましたように、京都大学には梵語・梵文学の講座がありまして、仏教学や印度哲学の専攻の学生もみなこの講座の講義を聞くことになっています。ところでサンスクリットというのはたいへんな言葉で、例えばフランス語を三年でマスターするような人でも、サンスクリットには十年かかるなどといわれるほど、面倒な言葉、しかしそれだけに文法的にも論理的にも曖昧さの少ない言語です。「高度に精巧な、完成した」言語といわれる所以です。

世界最古の（恐らく紀元前十五世紀あるいはそれ以前に遡るといわれる）ヴェーダ文献群はこのサンスクリットで伝えられたものであり、その後ウパニシャットを初め、膨大な量の文献がこの言語に属します。学者はヨーロッパからインドへかけての広い地域の諸言語を一括してインドヨーロッパ語族（Indo-Euroopean Languages）と申します。この地域の諸言語、つまりギリシ

ャ語、ラテン語を初め、ロシア語、ドイツ語、英語、フランス語、イタリー語など、東のほうではペルシャ語、インドのサンスクリットや諸方言など、すべて同一語族であって、太古の一つの言語から派生したものと考えられています。つまりこれらはみな語源的に親類関係にあるのですが、サンスクリットはそれらの間でも、最も古い学問用語なのです。学問用語といったのは、それとは別に日常しゃべる言葉がそれの俗語化・方言化されたものとしてたくさんあるからです。シャーキャムニ・ブッダ（釈迦牟尼仏陀）は、紀元前五・六世紀頃の人ですが、その少し後にパーニニという文法学者・音韻学者が出て、この時代にサンスクリットは真に「完成した」言語となり、それが現代にまで続いています。われわれが仏教学で扱う梵語は、これら広い領域のサンスクリット文献の極く一部に過ぎません。

皆さまに一つお尋ねしたいことがあります。それは、a, b, c からzに至るアルファベットは誰でも御存知ですが、しかし何故aの次ぎにbが、bの次ぎにcが来るのでしょうか、ということです。アルファベットという語は、ギリシャ語のalpha, betaから来るのでしょうし、それは文字表、わが国の五十音図のような文字表とでもいうべきもの、それによって辞書が編纂されたりするのですが、英語にせよギリシャ語にせよ、何故aが第一、bが第二……という順序でなければならないのでしょうか。ヘブライ語などもこれに深い関係があるようですが、その辺のことは私には一向わかりません。この同じ質問をいろいろの人に尋ねてみても、さあね、という返事が

**Sanskrit 文字の音素の表**

| | 無気 | 含気 | 無気 | 含気 | 鼻音 | 摩擦音 | | 母音 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 喉音 | k | kh | g | gh | ṅ | | h | a, ā | e |
| 顎音 | c | ch | j | jh | ñ | ś | y | i, ī | ai |
| 舌音 | ṭ | ṭh | ḍ | ḍh | ṇ | ṣ | r | ṛi, ṛī | |
| 歯音 | t | th | d | dh | n | s | l | ḷi, ḷī | o |
| 唇音 | p | ph | b | bh | m | | v | u, ū | au |

この他に特殊な用法のṃとḥがあって、独立の文字は総計約50である。それらを組み合わせて語をなすときは、多くの略形が用いられる。

返ってくるだけです。

こんなことを申すのは、サンスクリットでは整然たる文字表アルファベットが今申したパーニニの時代から作られているからです。それは文字の配列順序について、方法論的に非常に科学的であって、音の性質に従って、ハッキリ順序の意味がわかります。アルファベット文字表としては、まず母音が一括して最初に掲げられ、次ぎに子音が順次あげられてゆくというやり方です。このアルファベットが現代の辞書にもそのまま使用されています。

【当日は書かなかったが、ここに掲げる音素の表を御参照のこと】

母音の最初はa, 次ぎにその長母音のā, 同じように i, その長母音の ī, というように、全部で14あります。ṛi と ḷi は、r と l が母音として考えられた場合のものです。ḷī は理論上あっても、実際には使われません。単母音が重なって、e, ai 等の二重母音ができますが、いずれも長母音で、e, o の短母音はサンスクリットにはありません。二重母音は a＋i＝e, e＋i＝ai, a＋u＝o, o＋u＝au です。

次ぎに子音は口の構造や舌や歯などの使い方で分類されています。口の一番奥から前方の唇まで、発音される場所によって五種類にわけられ、その中で第一段の五つの子音はすべて喉からの発音、喉音です。その最初が ka 次はその有気音の kha 次がその濁音の ga とその有気音、最後がその鼻音で ṅa（nga と発音）です。五つ目の文字は五段ともすべて鼻音です。子音はすべて a をつけて呼びますが、右の母音がすべて結合しますから、カ、カー、キ、キー、ク、クー等々の文字ができ上がるわけです。

次の一段は喉音より少し前の上顎を擦って発音する ca（チャ）等で、その鼻音は ña（ニャ）です。三段目はさらに少し前方の上顎に舌を反転させて発音する ṭa 等。四段目は舌を前歯の根元につけて発音する普通の t, d, n です。五段目は最前方の唇による pa 以下 ma までの唇音です。

有気音や濁音については、すべて第一段と同様です。

次に ya, ra, la, va の四つが来て、順次母音の i, ṛi, ḷi, u に対応する半母音です。この四つは顎音以下の四音に属します。歯擦音 sa にも三種あって、反舌音以下の三音に属します。最後の ha は有気音の h ですが、舌も歯も使わない母音のような子音といってよいかと思われます。

辞書における文字の配列も右に述べた順序に従って、先ず a, ā, i, ī, u, ū, ṛi, ṛī, ḷi, e, ai, o, au の十三母音が並び、次ぎに子音が参ります。母音の一つ一つに子音が付いて aka, akha, ……等となり、子音の一つ一つにも母音が付いて ka, khā, ki, khī……等となり、最後が ha, hā ……等です。

以上のような文字表が、音韻論に基づいた極めて科学的なものであることは明かです。その点、西洋の alphabet はどうなのでしょうか。この文字表が紀元前三世紀のころに出来上がっていたということは、インドの文化が非常に高度なものだったことを物語るといってよいでしょう。

この文字表は中国にも伝えられ、わが国にも空海などによって悉曇字母の名で将来され、盛んに研究されました。ただしそれで梵語がわかるわけではなく、ただ悉曇（しったん）文字を書くための研究です。わが国の五十音図は、恐らくこれに倣って作られたものと思われます。最初に五つの母音を一括し、次がカ行で始まるなど、サンスクリット文字表の影響に違いありません。サ行は「摎」で音写された ca から来たもので、歯擦音の sa と同視されています。タ行には反

舌音と歯音との区別はない。鼻音や唇音が次にナ行、ハ行として上げられますが、最後のヤ・ラ・ワの三行は、文字表の ya, ra, la, va の半母音から来ていることは疑いがありません。このようにして悉曇字母に沿って日本の発音を五十音に纏めたのですが、それはサンスクリットの五十字とは意味が違います。母音と子音との結合したものを一字にしているのですから、片仮名は五十あっても、音素としては二十数個しかないわけです。

とにかく文字表に倣って作られていますから、五十音図は、不完全ではあっても、西洋の alphabet よりは科学的だといってよいのではないでしょうか。西洋の alphabet では、ほぼ五字前後の間隔でアエイオウの母音がこの順序で出てきていますが、このことに何かの意味がありはしないかなどと考えたりも致します。

ともあれ本日は、現在の仏教学がこのような古代からの高度なインド文化を背景にして考えられていることをお話したかったのです。ところで最初に申したように何かご質問がおありでしょうか、あればそれをうかがいたいと思いますが……

**（質問）**「浄土三部経の一つ、観無量寿経の原典はわからないと言われていますが、今もそうなのですか。」

観経の原典は見つかっておりません。というよりも、あれは中国あたりで作られたものだろう

と考えられています。何処で何時頃かということはわかりませんが……。観経は五世紀中頃の僃良耶舎（Kālayaśas）の訳となっていますが、原典もないし、インドの論師がこの経を引用した痕跡もないし、チベット訳にも残っていないというわけで、インド原典ではなかろうと一般に考えられているようです。

仏教は中央アジアを通って数世紀かかって紀元前後に中国に入って参りますが、その途中、アフガンあたりからタリム盆地へかけては多くの民族があり、種々異なった思想や文化があって、仏教はそれらと接触しながら多少の変容も受けたこととおもわれます。従って中国仏教を考える場合には、中央アジアも重要な意味を持ちます。三部経の中の他の二経、大無量寿経と阿弥陀経とには、立派な梵本が残っていますから、阿弥陀仏の西方浄土の信仰がインドにその源流があったことは確かですが、この信仰はむしろ中央アジアから中国にかけて盛んに受け入れられ盛行したように見受けられます。観経もこの中央アジアから中国へかけての何処かで作られたのかも知れません。

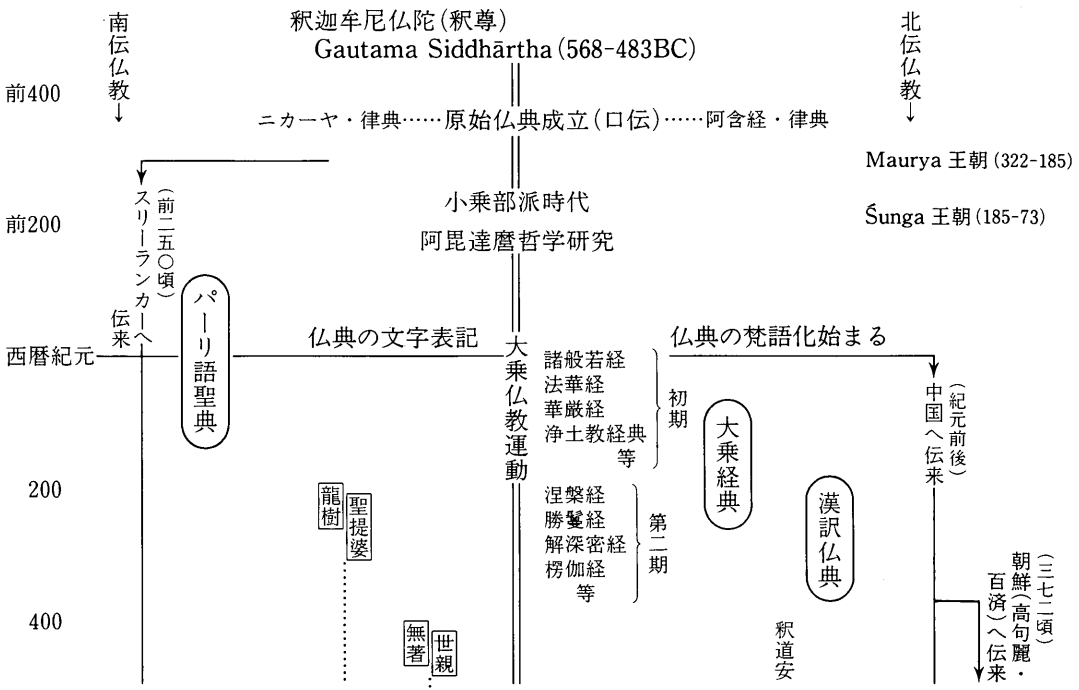
もしそうとすれば、これは偽経というべきものです。偽経あるいは疑経というものは、シナ仏教には古くからあって、実はそこに重要な意味もあります。と申しますのは、偽経といってもこれは悪気を以て贋作するという気持ちは毛頭ありませんで、それ以前に輸入されている浄土信仰の理解を踏まえながら、より多くの人々を信仰に導き入れることを目的として新たに作られたも

のだからです。こうした偽経には重要な作品がいろいろありまして、観経もその一つかもしれません。観経などを読んでみると、インド風の言い回しやスタイルが多くある、残っている、ことを感じます。

その意味では、大乗仏典にも同じような事情があります。大乗仏典はすべて「仏説」といって、釈尊の真説とされ釈尊に仮託されていますが、実は釈尊より四、五百年も後の紀元前後のころから以後、大乗仏教が続々と作り出したもので、釈尊の説法の直接の記録ではありません。釈尊の言葉を敷衍しながら、小乗的な理解を排撃して、大乗的に仏陀の真意を明らかにしようとして編み出したものです。その意味で、いわゆる「大乗非仏説」です。しかしそこに贋作などという意識は全くありません。

わが国では明治の頃には、「大乗非仏説」を唱えた学者がたいへんに叱られるという大事件がありましたが、今ではそんなことはありません。誰でも知っていることです。ただ「仏説」の文字が、歴史的にではなく、その意味が拡張され幅をもって理解されるべきなのです。すでに古くインドの五世紀ころの論書に、「大乗非仏説」という非難と、それに対してより深い意味で仏説なのだという大乗の側からの答釈とが述べられています。

ついでにお配りしたプリントについて少し説明しましょう。仏教の伝播とその聖典の成立を極


釈迦牟尼仏陀(釈尊)
Gautama Siddhārtha (568-483BC)
南伝仏教
北伝仏教
前400
前200
西暦紀元
200
400
ニカーヤ・律典……原始仏典成立(口伝)……阿含経・律典
Maurya 王朝 (322-185)
Śunga 王朝 (185-73)
小乗部派時代
阿毘達磨哲学研究
(前二五〇頃)
スリーランカへ伝来
パーリ語聖典
仏典の文字表記
大乗仏教運動
諸般若経
法華経
華厳経
浄土教経典
等
初期
涅槃経
勝鬘経
解深密経
楞伽経
等
第二期
龍樹
聖提婆
無著
世親
大乗経典
仏典の梵語化始まる
漢訳仏典
釈道安
(紀元前後)
中国へ伝来
(三七二頃)
朝鮮(高句麗・百済)へ伝来

600
800
1000
1200
1400
ビルマ伝来（五〇〇頃）
カンボジア
タイ
その他
チベット伝来（七世紀初頭）
チベット訳仏典
モンゴル伝来
仏護…清弁
月称…寂天
寂護
中観学派
Jñānagarbha (700-760)
陳那…護法
安慧
瑜伽行唯識学派
Kowalsita (740-790)
(680-740)
密教経典
大日経
金剛頂経等
鳩摩羅什
真諦〔摂論宗〕
玄奘〔法相宗〕
四大翻訳三蔵
不空〔密宗〕(705-774)
曇徴〔浄土教〕
智顗〔天台宗〕
吉蔵〔三論宗〕
法蔵〔華厳宗〕(643-721)
慧能〔禅宗〕(638-713)
聖徳太子
(574-622)
最澄〔日本天台宗〕(767-822)
空海〔真言宗〕(774-835)
〈1200年頃，インドにて仏教滅亡〉
日本へ伝来（五二二頃）
日蓮〔日蓮宗〕(1222-1282)
道元〔曹洞宗〕(1200-1253)
栄西〔臨済宗〕(1141-1215)
親鸞〔浄真宗〕(1173-1262)
法然〔浄土宗〕(1133-1212)

く簡略に現わした図です。一番上に釈尊の年代があります。その仏陀の説法は、師匠がすべてを暗唱し、それを弟子に口伝し、こうした方法で代々伝えて参りました。こうしてパーリ語を用いた原始仏典が成立します。この口授伝承、口伝の時代が数世紀続きます。文字はインドには古くからありましたが、主に商売などに用いられ、聖典を文字化することは憚かられたようです。

しかし紀元前後、すなわち大乗仏教運動の興起の頃、口授伝承せられたものが文字に写され聖典が文字化されるようになりました。更に同じ頃、パーリ聖典を梵語に翻訳されサンスクリット化するようになりました。この二つの動きは大きな変化をもたらします。文字に書き表されるとなると、記憶伝承の時代とは違って、長大な経典も可能になります。大般若六百巻というような大きな経典も出現するようになりました。また学問用語であるサンスクリットに翻訳したことは、時代の要請から、仏教の経典が学問的に高い水準のものであることを誇示する必要があったからでしょう。それ以後、大乗の典籍は殆どすべてサンスクリットで書かれることになりました。

まだ口授伝承の時代に、パーリ語の聖典がスリーランカに伝えられたことは前にお話しました。紀元前三世紀のマウリヤ王朝のアショカ王は、未曾有の大帝国を築いた人ですが、過去の多くの戦争の惨禍を悔いて仏教に帰依し、仏教の伝道師をインド内外の各地に派遣しました。王の甥のマヒンダという人もその一人で、スリーランカに仏教を伝えました。後にこの仏教は更にビルマ、タイ、カンボジア、ヴィエトナムなどに伝えられ、いずれもパーリ聖典を中心とし、それが今に

至るまで続いています。これを一括して南伝仏教と申します。この仏教はかつてはスマトラ、マレー、ジャヴァなどにも伝わりましたが、これらの地域は今ではイスラム化しています。

南伝に対して北伝仏教は、北方の中央アジアを経て中国にまで到達した仏教です。南伝仏教がパーリ語で書かれた原始聖典（小乗時代の聖典）を奉ずるのが主であるのに対して、北伝仏教は、小乗の典籍も含みますが、サンスクリットによる大乗の聖典が主流となっています。中国では多くの外国僧の手で、盛んに聖典の漢訳事業が行なわれ、千年以上にわたってそれが継続しました。最も立派な漢訳が続々と世に出たのが、五世紀初頭からの約三百年間で、同時に中国仏教はその最盛期を迎えました。図の中央に縦に記した仏教の流れとしての大乗仏教運動の左側には、インドの論師たちの名を記しましたが、右側には著名な漢訳三蔵や中国仏教の高僧たちを記しました。漢訳仏典はさらに西夏語などにも訳されました。この漢訳による仏教が、さらに朝鮮・日本およびヴィエトナムなどに伝わったことはよく御存知の通りです。

もう一つの北伝はチベットへのそれです。ここでも盛んに翻訳が行なわれたこと、その典籍の内容が漢訳に似ていることなども前にお話しました。チベットの仏教は後に蒙古民族の間に浸潤し、アジアの広い地域を覆いますが、このチベット訳から蒙古語訳や満州語訳なども作られました。

以上が仏教の伝播の大略です。西方へ向かっては、かの宗教の坩堝である中近東へも伝えられ

たであろうことは容易に想像できますが、そしてその痕跡も知られていますが、仏教が盛行したという証跡は何処にも全くありません。こうして伝播によって種々の膨大な典籍が産みだされましたが、お話したように四つの言語によるテキスト、パーリとサンスクリットの原典、漢訳とチベット訳の大蔵経の四つが最も大事です。南伝仏教では組織だった翻訳はなく、比丘たちは直接パーリ原典を読みその研究をします。朝鮮やわが国でも翻訳をしたことはなく、漢訳がそのまま使われているのもそれに似た状況です。

この膨大な分量の典籍を組織的な叢書として体系づけることは、インドの人々は殆どしておりません。大蔵経として分類し整理したのは、南伝仏教、それから漢訳、チベット訳など、すべて外国でのことです。またインドでは紀元一二〇〇年の頃、仏教はイスラムの侵入によって破壊され、すっかり滅亡してしまいました。比丘たちの多くは経典や仏具をかついでヒマラヤ山中に難を避けたものと想像されます。だからこそ梵文写本がネパールやチベットで発見される理由がわかります。

インドを御旅行になっても、ですから仏教に出会うことはありません。その遺跡や石の仏教彫刻を見るだけです。遺跡は英国の統治時代から各地で発掘され、美しく整備されていて、昔の寺院のあり方を知ることができます。彫刻はまた素晴らしいものが各地の博物館に数多く残っております。

バングラデシュのチッタゴンという所に僅かに生き残った仏教がありますが、微々たるものです。ところが最近、インドでは仏教徒が急速に増えつつあります。インドには昔からカスト（種姓・階級）の組織があって、人々は生まれながらにあるカストに属します。カストは同時に職業も意味しますが、カストの差別は頗る厳重で、便所掃除は永久に便所掃除であり、違ったカスト間では婚姻はもちろん、同席したり共に食事したりが許されません。カストの差別は今では法律で禁止されていますが、ヒンズー教（インド教）一色のインドの永年の風習は、容易に払拭できないようです。低い階級のカストも多数ありますが、その中で最低なのがいわゆるuntouchable（不可触賤民）で、一団をなして世の中から離れた村に住んでいます。

このようなカストの思想をその昔に否定した第一人者は、釈尊です。人の価値は生まれによって決まるのではないといって、仏教教団内ではどのカストの者も平等に扱われました。これが仏教徒が今増えつつあることの一つの理由です。アンベドカルという人の指導の下で、何万何十万という人々が、集団で改宗することが新聞に報ぜられていました。旅行をしていると、召使いなどで、にこにこしながら「おれはバウッダ（仏教徒）だ」と誇らしげに告げに来るのに出会うことがあります。恐らく仏教の教理などをわきまえているわけではなく、ただバウッダであると称することによって、カストの観念から解放されることが一つの大きな喜びなのでしょう。とにかくこうして民衆の民主化・平等化がインドでも少しづつ進められていくことを感じます。

日本の仏教は聖徳太子のとき輸入せられ、平安朝の最澄・空海によって確立せられましたが、なおこの頃は貴族仏教というべきものでした。それが山を降りて民衆にまで及んだのは、法然以下の鎌倉仏教以後といってよろしいでしょう。これらの祖師たちによって、仏教は全く日本的なものとなりました。そこには世界的に見て非常に優れた特異な思想が展開されるようになりました。インドの仏教その他、特に南伝仏教と較べてみると、日本の仏教にはすっかり違った様相が見られます。一方が仏教なら他方は仏教ではないと言えるほどです。

**(質問)**「……」(テープ不明瞭。観経あるいはその英訳、あるいは英訳一般についての質問か?)

……え、漢訳しかございませんね。

先程のご紹介のように、私も仏典の英訳のしごとなどもやっております。翻訳は世界の各地でいろいろの人がやっていて、例えばアメリカの大学で、今まで翻訳や研究のない経典を対象にして学位論文が書かれたような場合、その経典の英訳が論文に付けられたりします。こうしてサンスクリットから、チベット訳から、あるいは漢文や日本語からの仏典の新しい翻訳が、いろいろ出て参っております。仏典の英訳は龍谷大学では昔からやっており、西本願寺の国際部でもここ十数年やっていて、私もそれらを手伝っております。東京に仏教伝道協会というのがあって、私

は昨年からその理事長を勤めておりますが、ここでも英訳の事業が企画され、また小さな聖典を三十数ヵ国語に訳して出版したりしております。

ところで先ほども申したように日本では漢文の典籍を儒教であれ仏教であれ日本語（大和言葉）に翻訳した歴史がございません。すべて漢文のまま返り点をつけて読み下しています。返り点というものは、甚だ器用なやり方で、極めて巧妙な一種の翻訳です。しかしその結果、日本語では二つのことが運命的であった、と私は思います。一つには大和言葉は発達せず、学問用語にはなり難かったということ、二つには返り点で漢文は読むが、その意味の理解は一般には曖昧なままだったのではないかということです。大和言葉は、翻訳によって新しい要素が加わり発達するということがなく、和歌などの詩文には大いに活躍しましたが、明治以後の学問用語、特に自然科学のそれは殆どすべて漢文か外来語をそのまま用いました。同時に漢字・漢文が日本人の生活の中で大きな比重を占めるようになったにも拘らず、一般人にとってその漢字の意味は必ずしも正確に解っているわけではないようです。どうも日本人は外来語をそのまま使うのが好きな民族かもしれません。近ごろは殊に横文字や片カナが頻繁に出てきますが、例えばマンションなど、噴飯ものの使用例も少なくありません。漢字の使用の歴史にも同じような事情があったのではないかと思います。日本語は外来語を採り入れることによって豊富な言語になったのはよろしいが、その外来語に対する理解は往々にして不正確なままになり勝ちです。

それはともかく、日本語にすら翻訳をしなかった日本人が、仏典の英訳をしようと謂うのですから、これはたいへんお節介なこと、しかも困難なことと言わねばなりません。しかしヘブライ思想、キリスト教思想、イスラム思想などが根幹となって動いている世界に向けて、仏教思想を少しでも普及させようという仏教伝道協会などの英訳の意図は、それはそれなりに意味のあることでしょう。従って日本での英訳ということは、仏教を求める欧米の学者の翻訳事業に適当な忠告を与えることによって、つまり共同事業的に、少しでも良い訳を生み出すことでなければなりません。事実、日本に留学して仏教を研究している学生に対しては、各地の大学の教授たちが同じような意味の忠告を常に与えているのです。

**(質問)**「サンスクリットを勉強しなければならないと思いますが、サンスクリット語とパーリ語とはどう違うのでしょうか。(テープ十分に聞きとれず)」

パーリ語はですね、サンスクリットの俗語の一種です。俗語は沢山ありまして、各地の話言葉、マガダ語とかシャウラセーナ語とかたくさんありますが、お釈迦さんが何語でしゃべられたかも、実はわかっておりません。恐らくマガダ語でしゃべられたであろうと想像されています。この釈尊の説法を表わすために、西インドの俗語を整備して文語的にしたのがパーリ語です。「聖典語」の意味です。文語的ではあるがやはり俗語なのですから、発音も文法もサンスクリットに比して

遙かに簡単です。例えば母音は a, ā, i, ī, u, ū, e, o の八つだけで、日本語の母音五つに近いです。俗語というものは常に簡素化の方へ進むものです。

**（質問）**「パーリ語の聖典に書いてある思想とこちらの大乗仏典にあるのとは、まるで違うのでしょうか。……（後半不明）」

いや、全く違うというわけではありません、もちろん大乗的な哲学としては違うのですが…。で、大乗運動において先ず大乗経典が作られ、それが数世紀にわたります。続いてその註釈書とか体系的な大乗論とかの論書が出て参りますが、それら論書ではしきりに釈尊の言葉を引用します。それはすべて（パーリ聖典に相当する）阿含経典、すなわち古い小乗時代の経典からの引用です。阿含はすべて仏語なのですから、それを無視するなどということはありません。むしろ非常に大事に致します。ただ大乗と小乗と何処が違うかといえば、いろいろ違いがあります。例えば小乗は自利的であるのに対して、大乗は自利・利他、特に利他の精神に重きをおくなどもその一つ。小乗では煩悩を滅して涅槃を獲る（灰身滅智）のが目標、それに対して大乗では煩悩を滅することよりも菩提・悟りの獲得に重きをおくなどです。また小乗では仏陀の言葉に拘泥し、それを文字通りに墨守する傾向があります。正午以後は硬い食物は一切口にしない、という戒律は、南方の仏教では比丘によって厳重に守られますが、何故そうあるべきかという意味や理由は問題

視されません。それに対して、大乗は文字よりもその精神を明らかにしようとします。お釈迦さんがおっしゃったことの本当の意味はこうなのだ、という形で大乗仏典が出来上がって参ります。ですから先ほどの阿含の言葉を引用することも、簡単にいえば引用によって大乗精神を発揮しようとするわけです。小乗的な理解は否定するが、決して仏語としての小乗仏典を否定しているわけではありません。

**（質問）**「先ほどの翻訳の話の中で、日本では漢訳のお経もありますが、（その他に各宗派で作られたものもある……テープ不明瞭。…）それらを全体として仏典の中に入れて然かるべきでしょうか。」

それは当然、全部入ります。…そうですね。日本の宗派の中で作られたものは、中には余り価値のないものもあるかもしれませんが、祖師たちのお作りになった本格的なものは、全部入ります。

これに関連して、漢訳の大蔵経は最初はインド原典からの漢訳だけでその構成が考えられ、それ以外の書は蔵外といいました。しかし漸次その枠が広げられ量が増えて参りました。それは中国で作られた蔵外の良い書物も、だんだん大蔵経に編入されたからです。これを入蔵といいます。昔、唐の太宗皇帝が詔勅を以て良書の入蔵を決めたりしました。現在、漢訳の大蔵経は世界どこ

でも「大正新修大蔵経」（大正から昭和へかけての出版）を用いますが、これが最も量が大きく、大正蔵経百巻の中、原典からの漢訳は三十二巻までで、他の六十数巻はすべて中国・朝鮮・日本で作られた註釈書や宗義書類です。翻訳（英訳）の場合はもちろんこれらすべてがその対象で、宗派の運動としての翻訳ですとなおさらそうです。

**（質問）**「翻訳の問題に関連しましては……」（以下、テープ長く不明瞭。般若心経などに空という文字があり、śūnyatā という語の訳であるが、この文字による我々の理解が、原典の意味や訳者の理解と違うかもしれないとのお尋ねのようであった。）

まさにおっしゃる通りだと思います。ですから翻訳は非常に難しいこです。

「一般に不可能ということでしょうか。」

不可能といってもいいほどです。それは文学書の場合などでも、意味はわかるがその雰囲気やニューアンスを伝えることは殆ど不可能です。しかし、だからといって翻訳しない方がよいということにはならない。不可能にも拘らず、やはり翻訳せざるを得ないということがあるわけです。（同じ日本語を語り、日本の概念を使いながらも、その概念内容の理解は百人百様に違っているかもしれません。究極的立場からすれば、言葉や概念では真実を伝え得ないというのが、仏教にいう不可説とか不可思議とかということです。しかしその不可説を、不可説なるが故に、可説に

するという立場もあると思われます。）

**（質問）**「殊に思想に関する……」（以下、テープ不明瞭。哲学や思想に関しては殊に翻訳は困難であり、従って翻訳を通しては本当の理解に達し得ないのではないか、とのご質問のようでした。）

このシューニャター（śūnyatā）という字を「空」（ソラとかカラッポ）という文字で訳したわけですね。しかしこの翻訳語は決して悪い訳語だとは申せません。

この文字が般若経などでは繰り返し繰り返し出て参りますが、それを繰り返し読むことによってだんだんそれが単なるカラッポやソラではなく、それ以上に充実した何物かを指していることに気が付くことがあるのではないでしょうか。経には空の語義の説明もあり、何故空なのかも説かれ、あらゆる角度から多面・多様に説かれていて、色即是空であり、受も想も行も識も空であり、一切皆空だというような調子です。そうした多面的なあり方の空、多様なコンテクストにおいて出て来る空に永年親しみ接しながら考えてゆく間に、われわれの祖師たちは、次第にśūnyatāの文字を使用したインドの祖師たちと同じ心境でそれを見るようになったことと思われます。つまり翻訳語の文字の当面の理解ではなく、経が表現する全体的な感触からの理解によって、同じ心境に到達するのです。ただし賢明な祖師たちの、数十年の勉強と修行の裏打ちがそこ

にあるからでしょう。チベット語では stoṅ pa（トンパ）と訳されますが、やはり同様なことがあると思います。サンスクリットをまるで知らない偉いラマの書かれたものを読んでも、その文章にサンスクリット的な思惟法が浸透していることを感じます。翻訳語を用いながら、それがチベット的ではなく、インド的、原語的にはたらくのです。

ついでに申し上げますが、空性の原語の śūnyatā は、英語では漢訳の空に近い意味の void-ness とか emptiness と訳するのが一般的です。中にはこの概念の内容からして absolute「絶対」と訳すべきだという学者もありました。śūnya という字は zero 零という字と同じ語根だそうで、インドでは数学でゼロを śūnya と申します。従って空性を zeroness と訳しても一向差し支えありません。われわれには emptiness, zeroness, abosolute あるいは空性などの翻訳を併せ考えることによって、少しは śūnyatā のもつ意味に近づき得るのではないでしょうか。ゼロはインドで発見されたと言われていますが、これは興味のあることです。ゼロはあらゆる数の根本です。それと同じく、あらゆるものが空なればこそ、あらゆる存在が可能になるのであって、それがゼロたること、zeroness なのでしょう。

**（質問）**「……自然法爾の自然（という言葉の原語は何かあるのでしょうか。）」

これは親鸞聖人の言葉としての自然法爾ですね。それの正確な原語はわかりません。というよ

り、想定が困難です。

「格義仏教で……（テープ不明瞭）」

格義仏教でこの自然という字が入って来たのですか。どなたがそれを……。え、森三樹三郎さんがそれをおっしゃった。……あゝ、そうですか。森さんは私よりも若いのですが、早く亡くなられました。たいへん惜しい人をなくしました。（格義仏教の頃、道教の影響で自然という字が入ってきた）そうなのかもしれませんが、自然と漢訳された字はサンスクリットにはいろいろございます。例えばスワヤンブーという字などがそうですね。

「…それは自然法爾の自然とは違いますか。」

少し違います。スワヤンブーsvayambhūは、self-existent自己存在、独立存在の意味で、原因に依らない絶対存在などを指したりします。これを「自ら然り」という字で訳しました。（しかし普通「無功用」と訳されるanābhogaも自然と訳されますが、むしろこれなどが親鸞の自然に近いでしょう。無功用とは特別の「意図やはたらきを加えることなく」という意味で、つまり人間のはからいや努力が捨離せられた境地、第八地の菩薩の境地を指します。同様に「無為」「無作」と漢訳されるanabhisamskāraも「作為がない」という意味で自然と訳された例があります）。自然法爾の法爾は、法性dharmatāというのに近く、自然が法性（ものの本性）としてあることをいうのではないでしょうか。

**（司会者）** 他に質問はございませんか。……それでは先生、長い間どうもありがとうございました。

どうもたいへん失礼致しました。まとまりのない話をご静聴いただき、まことにありがとうございました。

**後記**　準備不足のままお話をしたので前後辻褄が合わなかったり舌足らずの所が多いことを、当日のテープを聞きながら感じて当惑しました。そのテープから書き起こしてもらった原稿に、いろいろ書き添えたり書き改めたりして、少しは話が通るようにしたつもりですが、悪しからずお詫び申し上げます。

（京都大学名誉教授・日本学士院会員）